

キャリアパス支援講演会 実施報告書

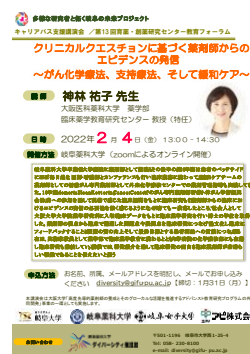
【演題】 クリニカルクエスチョンに基づく薬剤師からのエビデンスの発信
～がん化学療法、支持療法、そして緩和ケア～

【講師】 神林 祐子 氏（大阪医科薬科大学薬学部 臨床薬学教育研究センター 教授（特任））

【日時】 令和4年2月4日（金） 13:00～14:30

【場所】 Zoom 利用によるオンライン開催

【参加者数】 142名（岐阜薬科大学 139名、岐阜大学 1名、その他 2名）



講師は岐阜薬科大学を卒業後、大学病院薬剤部に入局し臨床業務に携わってきた。入局約25年後、大学院博士課程に社会人学生として入学し、臨床薬学研究を行い学位を取得された。現在は実務家教員として現職に就き、大学病院での臨床研究も継続している。

薬剤師時代ががん専門薬剤師海外派遣事業で訪れた米国の薬学教育を見て、米国の薬学部では臨床現場体験に重点をおき患者や現場から学ぶ事を重視していることに感銘を受けたという。これからの日本の薬学教育も、臨床、研究、教育の3つの柱を実践していく必要があると強く感じたという。

講師はこれまで臨床業務の中で生じたクリニカルクエスチョン（臨床疑問）を研究課題として取り組んできた。研究責任者とはいえ、薬剤師のみでできるものではなく、病院内の多職種の協力は不可欠で、臨床研究にはチーム医療が重要であると痛感したと話された。

キャリアの継続について、出産・育児により中断されることがなかったのは、勤務先の福利厚生制度を利用しただけでなく、家族の協力や支えが大きかったと話された。一方で、大学院に通うという学位取得のための研究は、薬剤師としての通常業務以外で行わなければならない、休業日や夏季休暇などの休日をほぼ研究活動に充てるなど、覚悟が必要であったとも振り返られた。

本講演会の出席者には、今春以降実務実習に出る学生が多く、研究には大学で行うような基礎研究だけでなく臨床現場で行うものもあることが理解できたと思う。また、チーム医療も重要であることが示され、研究活動を行う意義なども知ることができ有意義な機会であった。キャリアを継続し臨床機関から研究・教育機関へと様々な経験をされた大先輩の話は、地道な毎日の積み重ねが成果に現れるという研究者としての心構えも含め、今後の進路を考える一助となったと考える。

